

5年1組

受け取ってもらえる喜び・やりがい



和紙ハガキ・年賀状への挑戦

「楮和紙」の可能性として、「和紙ハガキ」に挑戦しました。それは、これまでの私たちの活動を振り返る中で出てきた「和紙を広めたい」という思いから始まったものです。ちょうど4年生から「和紙を使ってお世話になった方に手紙を書きたい。国語で学んだ和紙を使いたいんだけど…」という依頼もあり、和紙ハガキを作ることになりました。初めて和紙ハガキを目指して、紙漉きを行ったときには、限られた材料から文字が書けるくらい丈夫なものにするのが難しく、あらためて紙漉きの奥深さを感じました。子どもたちはどのように手渡せるハガキにするかを試行錯誤する中で、ハガキの丈夫さ、書きやすさなどの規格を考え2枚を張り合わせて1枚のハガキにすることにしました。

納品準備では、自分たちの作ったものをもう一度見つめ直しました。重さを測り直したり、手触りや厚さを確認したりする中、Sさんたちは「先生、つまようじある？」と言って細かい部分の接着の必要性にも気づいて直していきました。「なんとかいい和紙を届けたい」そんな思いが伝わってきました。

和紙ハガキが完成した後、4年生の学級に全員で行き、一人ひとり和紙を手渡しました。手渡すことに緊張しながらも、受け取ってもらえた嬉しさや、喜んでもらった「やりがい」を感じていました。渡した時の手応えは一人ひとりが感じているものとして残っているように思います。誰かのために何かができる喜びを子どもたちと感じられたことをうれしく思います。

渡した時もよろこんでくれたし、渡した後もさわったりして楽しそうにしてくれて、これまでやってきたかいがあったと思う。初めて人にわたしたけど、すごく喜んでくれてうれしかった。(Kさん)

4年生がすごーいって言うてくれて、すごくうれしかったです。またハガキづくりやりたいなって思ったし、やりがいがあるなと思いました。(Hさん)

冬休み前最後の1週間は身近な人に渡す「和紙年賀状」に挑戦しました。合計で約450枚の年賀状を作りました。1度年賀状の形になったものも、水に溶かせばまた再利用することに気づいたZさんの姿からは、大量生産の中でも1枚1枚見極めながら、受け取ってくれる人たちのことを想って作っていることが伝わってきました。

冬休み明けは、自分たちのハガキ作り・年賀状作りの活動がどうだったのか振り返っていききたいと思います。

